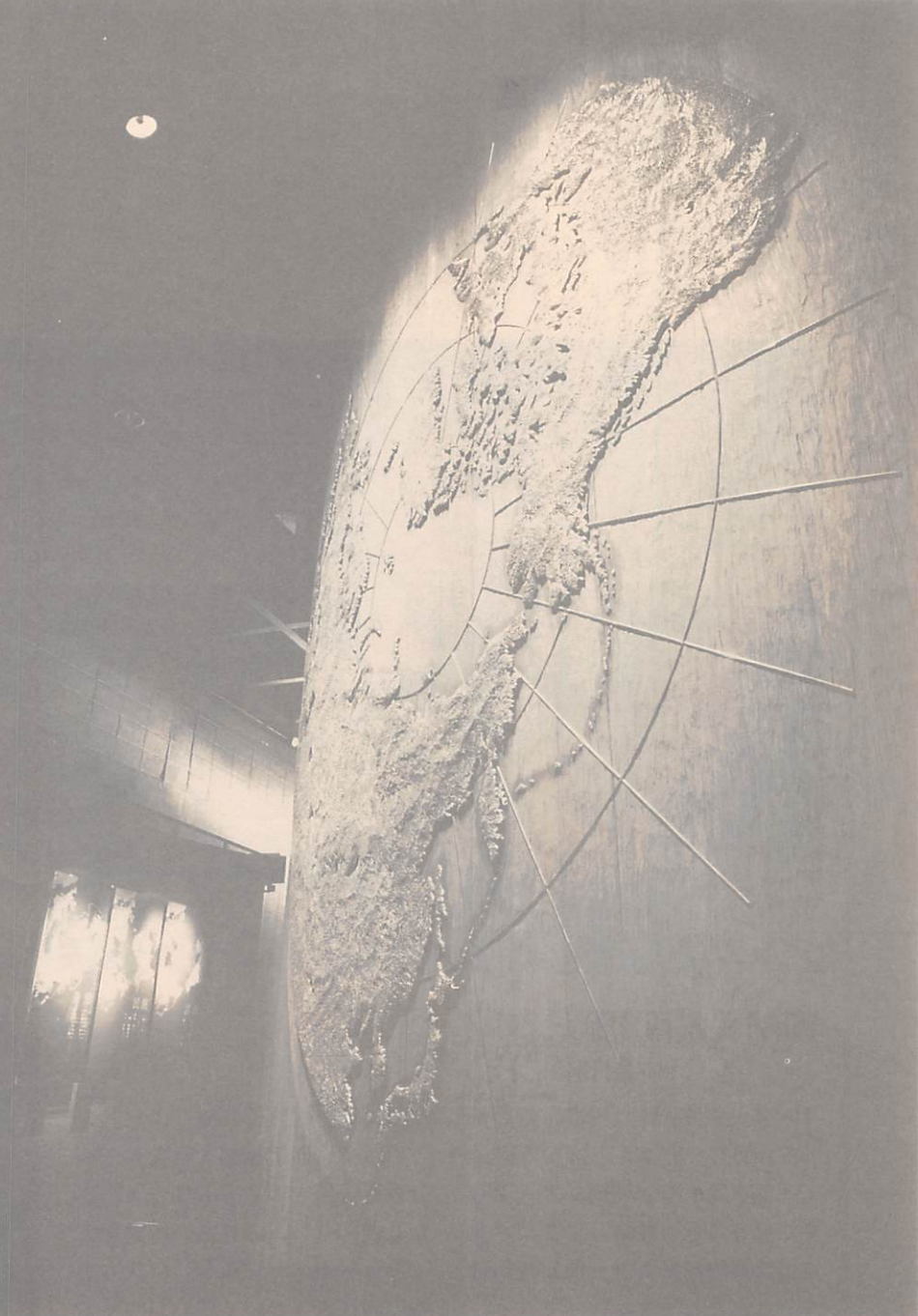




時間と空間を超えてきた資料が
北の文化を話しはじめる

北方民族博物館はユーラシア、北アメリカ、
グリーンランドの先史時代から現代まで、
北方文化を対象とする博物館です。



博物館外観



エントランスホール

『北方民族博物館だより』 創刊のことば

北方民族博物館は平成3年2月10日にオープンしました。

「北を愛する」仲間が1人でも多くなることを願い、ここに『北方民族博物館だより』開館特集号をおとどけします。

先史時代から日本列島は北方ユーラシアと密接な関係を持ち、とくに北海道は北とのつながりにおいて重要な位置をしていました。しかし一方で、北方の民族・先史の研究者は日本において多いとはいえ、これらの分野の研究は今後期待されているところです。

北方民族博物館では常設・特別展示をはじめ、講演会、講座等の事業や北方の文化に関する調査研究、資料収集活動を行っています。

この『北方民族博物館だより』をとおして、研究機関・研究者、社会教育機関とのネットワークをはかるとともに、これらの活動を広くみなさまにお知らせし、北方地域の諸民族について関心を持っていただきたいと考えています。

今回は開館前の準備作業から、2月9日の式典ならびに10日の一般公開、それに続く開館記念特別展、北方民族文化シンポジウムなどについてご報告します。また、平成3年度前期の特別展、講演会、講座等の内容についてもご案内します。

北方民族博物館

博物館開館に向けて

机上の構想から始まって、それが具体的な形となって現れるまで、約20年の歳月がかかりました。

網走市が博物館構想を打ち出し、北海道知事に道立の施設として設



建築工事

置を要望したのが昭和46年でした。それから開館するまでの間、北海道教育委員会では博物館の在り方、規模、運営形態などを検討してきました。

具体的な計画は昭和62年度から始まりました。この年度に策定された基本計画には「北海道の文化の振興と国際交流の推進」が博物館建設の趣旨として謳われていま



展示室工事

す。またこのなかで、広く北方地域の諸民族を扱う博物館であり、活動の上では、北方圏諸国との交流を深める施設であるという基本的性格も打ち出されました。

翌年度は博物館の建築および展示の基本・実施設計が進められました。建物全体は水鳥が羽を広げたかたちで、正面のエントランスホールは、北方地域に広く見られる円錐形の TENT をイメージしています。展示室は、粗削りの木とコンクリートの打ちはなしを基調に、厳しい北方の自然を表現した硬質なイメージになっています。展示手法として特徴的なことは、民族学において重要な位置をしめる映像資料を実物資料のほかに積極的に導入することで、解説パネル等では十分に伝えることができない情報を提供できるようにしたこと

です。平成元年度は、道教委・社会教育課に博物館の開設準備作業を専門に行う係が設置され、本格的な準備体制が整備されました。また、5月からは建築工事が開始され、翌年3月に建物が完成しました。

開館年度の平成2年5月に館長、副館長、管理課3名、学芸課5名の計10名の職員が発令され、博物館に着任しました。また、本年1月からは解説員6人が加わり、一般公開に向けての博物館の体制が整備されました。

展示工事は平成2年5月から開始されました。900㎡のスペースには、



トーテムポールのとおりつけ

約500点の実物資料を取り付けるケースや台と解説パネル、資料ラベルがあり、その他に映像資料用のモニター、竪穴住居の復元模型、マジックビジョンなど、実に多くの要素が盛り込まれています。これらを作り上げて行く過程において、それぞれの分野の業者の方々や学芸員との緊密なやりとりが行われました。



復元住居模型の製作

開館の直前まで展示の最終調整に追われ、2月9日は式典、特別観覧、祝賀会とあわただしいスケジュールでおわりました。このような中で10日の一般公開を迎えました。

開館記念式典盛大に開催

北方民族博物館は、平成2年5月に発足し、それと同時に財団法人北方文化振興協会に管理・運営を委託するというかたちでスタートしました。

館発足以来、一般公開に向け準備を進めてきました。平成3年2月10日の一般公開を前に、2月9日13時から横路北海道知事、細谷北海道教育委員会委員長はじめ、在札幌アメリカ、ソ連総領事館領事ら道内外の関係者約300人の来賓を迎え、網走セントラルホテルと当館の両会場で開館記念式典を開催しました。

■開館記念式典

式典は開会のことば、国歌斉唱のあと、細谷教育委員長から「道民に愛される博物館を目指し、博物館活動の充実に努め、文化の振興を図るとともに道民の貴重な学習の場となることを確信する」との式辞のあと、横路知事から挨拶があり、平成元年度から始められた当館の建設工事の経過について井上北海道住宅都市部長から報告がなされました。つづいて、文部

大臣および日本博物館協会長の祝電を披露し、最後に新沼北海道議会議長（代理）、安藤網走市長からそれぞれ祝辞をいただき記念式典は終了しました。

■特別観覧

式典終了後、6台のバスに分乗し、常設展示のテープカットの式場に臨みました。テープカットは財団法人の主催で行われ、まず林理事長から「財団が博物館の管理・運営をお引き受けすることになった。本道の文化の振興、国際交流の発展に努めたい」との挨拶があり、横路知事ら8人によるテープカットが行われました。つづいて当館の大林館長から常設展示の内容について説明があり、そのあと林理事長、大林館長の先導で出席者全員が展示室を観覧しました。観覧後、皆様から展示資料の内容はもとより、展示方法等についても高い評価をいただきました。



特別観覧

■開館記念祝賀会

北方民族博物館は地元網走市待望の施設であり、安藤網走市長を中心に政財界の方々により開館記念祝賀会が開催されました。

安藤市長の喜びの挨拶や地元出

身の鯉谷道議の祝辞などにつづき、横路知事、安藤市長らの手により鏡開きが行われ、出席者全員にお祝いの酒が振舞われました。大橋管内町村会会長の発声で祝宴に入り、最後に藤原網走市議会議長の万歳三唱で祝賀会を締めました。



祝賀会・鏡開き

■一般公開記念式典

2月10日の一般公開の当日は、素晴らしい天候に恵まれ、朝早くから多くの方が博物館に足を運んで下さいました。式典の始まる9時30分には200人をこえる来館者でエントランスホールは賑わいをみせました。

式典は大林館長の挨拶に始まり、松田網走支庁長や来館者の中から選ばれた児童、生徒、主婦らの手によりテープカットが行われました。北方地域の諸民族にスポットを当てた全国唯一の博物館は、終日来館者で賑わいました。



特別観覧・テープカット

『時間と空間を超えてきた資料が
北の文化を話しはじめる』

この解説で始まる常設展示では、
具体的な資料をとおして北の文化
を紹介しています。



常設展示入口

■ I 北のファンタジー

北をイメージした音と光が交錯
する場です。

■ II 北のクロスロード

はじめに、旧大陸と新大陸が地
続きになっていた頃の様子をパネ
ルと出土遺物で紹介しています。次
のコーナーでは北方地域の自然環境、
民族、言語をパネルで示していま
す。ここには9つの北方民族の言
語をきくことのできる装置があり
ます。

衣のコーナーでは、毛皮、魚皮、
腸などさまざまな素材の特徴をい
かしてつくられた衣類や装飾品、
衣類をつくるための道具などを展
示しています。

食のコーナーでは、北アメリカ
北西海岸で鍋として使われていた
木箱や、数多くの杓子類など、食
器や調理道具を展示しています。

住のコーナーには、北アラスカ

にくらすイヌイトの竪穴住居のほ
ぼ原寸大の復元模型があります。
また、北方民族の季節的な居住形
態をパネルで紹介するとともに、
サミのテントなど4つの住居模型
を展示しています。

常設展示紹介

■ III オホーツク文化・海の狩人

このコーナーは、かつて北海道
のオホーツク海沿岸に栄えたオホー
ツク文化をとりあげています。網
走市のモヨロ貝塚をはじめ、オホ
ーツク海沿岸から出土した土器、
石器、骨角器などの実物資料やパ
ネルでオホーツク文化を紹介して
います。



オホーツク文化・海の狩人

■ IV 環境と調和した北の暮らし

常設展示室中央に位置する円形
のコーナーでは、北にくらす人び
との精神世界を紹介しています。
儀礼に使用する道具や木偶、楽器
などを展示しています。ここには

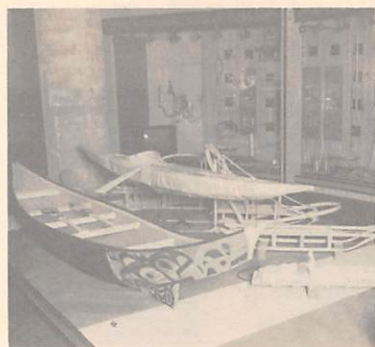
北方民族の歌や楽器の演奏をきく
ことのできる装置があります。

生業のコーナーでは各種の狩猟
具、漁撈具、トナカイ飼育のため
の道具など、また移動に使う船や
橇などを展示し、北の自然のなか
で、知恵と工夫をこらして生きて
きた人びとの技を紹介しています。
また、ここでは18世紀のグリーン
ランドに暮らすイヌイトの1年の
生活をマジックビジョンと呼ばれる、
模型と映像を組み合わせた装置で
紹介しています。

■ V 北の自然のなかで

子どものコーナーではさまざま
な揺籃や、玩具類を展示していま
す。そして、常設展示室最後のコー
ナーでは、現代の工芸品を展示
しています。素材は新しいもので
も、形や文様にその民族の伝統が
見られます。

このほか、常設展示室内では、北
方民族の生活を生き生きと伝える
映像をご覧いただけます。イグルー
の作り方や、狩猟の様子、さまざま
な道具の使い方、子どもたちのあ
そびなど全部で12種類あります。



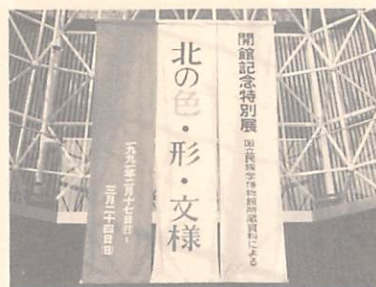
環境と調和した北の暮らし

開館から1週間後の2月17日(日)、大阪の国立民族学博物館から資料114点を借用して開館記念特別展を開催しました。最終日の3月24日(日)までの間で、約2,000人の観覧者を迎えました。

今回は、北米のイヌイトやインディアン諸族を中心に、各民族の豊かな美意識、精神世界がうかがわれる「色・形・文様」をもった資料を展示しました。ユーラシアから新大陸へ渡った人類は、さまざまな環境に適応し、それぞれの地域で独自の文化を形成してきました。これらの文化は、植生を主とした自然環境、生業活動などの文化的要素に考古学的な文化発展を考慮して「文化領域」に分けることができます。本特別展で対象となっているグリーンランドを含む北米地域は、10の領域に分けられ(分類については各論あり)、それぞれの文化の違いや共通性を理解していただけるよう、領域に従って展示を構成しました。この北米先住民の文化については、特別展の図録で、名古屋大学教授で国立民族学博物館の客員教授をなさっている小谷凱宣先生に概説していただきました。



特別展示室



エントランスホール内

開館記念特別展

『北の色・形・文様』

特別講演会

『石器時代のファッション —イヌイトの服装と社会—』

約150㎡と限られた空間ですが、常設展示ではあまり扱われていないグリーンランドの資料や、大平原領域など南の地域の資料も多く、ハウスボットやチルクットブランケットなど大型の資料も観覧者の目をひいたようです。また、さまざまなインディアン諸族の文化を紹介することで、「インディアンも北方民族なんですか。」という度々ある質問にも、答えることができたのではないかと思います。

3月17日には、目白学園女子短期大学のスチュアート・ヘンリ助教授をお招きして、講演会を開きました。

初めに、特別展に関連して、専門であるエスキモーについてその言語で考えれば、「イヌイト/ユイト」民族と呼ぶのが適切であること、一口にインディアンといっても北米大陸だけでも現在知られているところでは13語族、100以上の言語があり、その文化は多

様であることなどを指摘されました。また、自分の文化を中心に考える「エスノセントリズム」にも触れ、文化というものはその環境や時代に合ったものであり、一様の尺度で評価できるものではないことを話されました。

本論のイヌイトの服装については、その機能が、環境への適応ばかりでなく、社会生活や精神生活とも深い関わりをもっていることを、日本の事例と比較しながら説明していただきました。特に女性の服アマウティクは、何十枚もの部位を縫い合わせて作られており、男性のパーカほど防寒性がないものの、妊娠から子育てという変化に応じて簡単に改造ができること、また、そのフードや肩、前後の垂れの部分の大きさが着る人の成長に応じて変化し、それが生殖や母性といった象徴的な意味を持つことなどを、スライドを交えながらお話いただきました。

会場に集まってくださった参加者とのやり取りもあり、「楽しかった」「ためになった」との感想も聞かれ、展示資料を見る目も違ってくるのではないかと感じました。



講演会 スチュアート・ヘンリ氏

今回で5回目を迎える『北方民族文化シンポジウム』を2月20日、21日、22日の日程で、網走セントラルホテルにおいて開催しました。

本シンポジウムは第1回（昭和61年）以来、網走市に事務局がおかれ、北方諸民族文化に関する国際シンポジウムとして内外の著名な研究者の参加を得て開催されてきました。北海道立北方民族博物館が開館されたことから、事務局を当館を管理・運営している（財）北方文化振興協会に移し、第5回以降、引き続き開催していくことになりました。

今回は「北方の狩猟儀礼」をテーマに、海外から3名、国内から6名の研究者の発表があり、北方圏の多くの地域における狩猟に依存した生活を反映した様々な狩猟儀礼を比較検討し、狩猟と精神文化の相互関係について活発な議論が展開されました。

ストックホルム大学のL.ベックマン教授からサミの狩猟儀礼、とくにシャマニズムや祭祀の場、信仰の対象である“sied'di”やクマに対する観念などについて発表がありました。ソ連科学アカデミー・民族研究所のC.M.タクサミ博

士からは、ニブフの伝統的な狩猟に関する観念について発表があり、多くの質問が寄せられました。また、アラスカ大学のL.T.ブラック教授からアリユートや太平洋イヌイト、先史文化の狩猟者のヘルメットやバイザーがもつ象徴性について発表がなされました。

『北方民族文化 シンポジウム』 報告

国内の研究者の方々からは、次の標題で発表が行われました。

—— 煎本孝（北海道大学）「北部アサバスカン・インディアン」の狩猟儀礼と神話」、大林太良（北海道立北方民族博物館）「北方民族の狩猟儀礼におけるシャマンの役割」、萩原真子（東京国際大学）「動物の送り儀礼 — その分布と世界観 —」、黒田信一郎（北海道大学）「強制された狩猟 — ツングース系諸族のコスモロジーとの関連 —」、佐々木史郎（国立民族学博物館）「中国文献にみられる北方諸民族の狩猟儀礼について」、森 俊（富山県立高岡高校）「熊解体儀礼（特に臓器供儀）」とその周



辺 — 北陸の事例を中心として —

また、運営委員として、井上紘一（中部大学）、岡田淳子（北海道東海大学）、岡田宏明（北海道大学）の各先生に座長をお願いしました。

さらに、恒例となっています講演会を2月21日、午後6時30分からシンポジウム会場で開催しました。冒険家ローリー・イネスティラー氏を講師に、「カヤックは時間をこえる魔法の乗り物」と題して、北方の海獣狩猟民のカヤックが、現在はスポーツボートとして利用され、自然と対話する最良の道具であることなど、多くのスライドを交え興味深い講演をいただきました。

最後に、シンポジウムは、延べ170名、講演会150名の参加をいただき、実り多いものとなりました。講師、運営委員ならびに関係者の方々に深く感謝申し上げます。



シンポジウム会場



講演会
ローリー・イネスティラー氏

特別講座

「北欧・ソ連の博物館」報告

海外の博物館施設を数多く視察されている中村齋氏（北海道開拓記念館特別学芸員）に、北欧の野外博物館とソ連極東地域の博物館についてスライドを交えながらお話いただきました。

北欧の各地にある野外博物館には、その国民の博物館というものに対する考え方や、博物館が実際の生活の中でどう生きているのかといった点を見てとることができるといことを話されました。「今から100年前につくられた世界最初

の野外博物館スカンセン（スウェーデン）は、建物や道具の展示だけでなく当時の服装をした人々がその当時の道具を使って生活してみせる博物館であり、生活そのものを展示しています。また完成の時期を100年後に据えていたフリーランドムセー（デンマーク）は、建物の移築だけでなく周囲の環境も含めて復元するという方針をもっています」。

ソ連極東のユジノサハリンスク郷土博物館（サハリン）、ハバロフスク郷土博物館、マガダン州郷土博物館などは、展示そのものは質素だが「北方にくらす人々が今

も伝統にもとづいた生活をしていることが、その背景にあることを実感した」と結んでいます。

さらに、これらの博物館の現状から講師は、「博物館は長期的な展望のもとに作る必要があり、また多くの人が訪れる施設として、来館者が気持ち良く入れるものでなければならない」ことを強調されました。



講座 中村 齋氏

平成3年度・前期 博物館事業予定

特別展

「シベリアのトナカイ遊牧民
ネネツ展」

7月21日(日)～8月24日(土)

場所：当館特別展示室

講演会 7月28日(日)

テーマ 「シベリアの
トナカイ 遊牧民」

講師 佐々木 史郎
(大阪大学助教授)

講座・講習会

4月21日(日)

テーマ 「北方の舟」

講師 当館学芸員

5月12日(日)

テーマ 「北海道における先史
時代の海獣狩猟」

講師 西本 豊弘
(国立歴史民俗博物館
助教授)

6月9日(日)

テーマ 「北方民族の有用植物」

講師 当館学芸員

8月10日(土)

テーマ 「トナカイの社会誌
～北欧サミの生活」

講師 葛野 浩昭
(聖心女子大学講師)

9月8日(日)

テーマ 「民族映像の現状」

講師 岡田 一男
(エンサイクロペディア
シネマトグラフィカ日本代表)

●当館講堂にて14:00から開催します（1時間半程度）。

●ただし、6月9日は9:30までに当館講堂にお集まりください。

お問い合わせは博物館まで

編集後記

開館特集号の「博物館だより」を、当館の開館にあたりご支援、ご協力をいただいた方々や全国の博物館などの施設にお送りします。

平成3年度からは、名称も新たに第1号の「博物館だより」をお届けする予定です。博物館の活動の記録、広報としてはもちろんのこと、社会教育機関や研究機関として利用者と博物館とを結ぶメディアとして、さまざまな活用を提案していきたいと考えています。

今後ともみなさまのご支援をよろしく願います。